

ジョン・ステュアート・ミル

馬場啓之助

多面的な活動をささえたもの

ジョン・ステュアート・ミル John Stuart Mill (1806~1873)の六十七年にわたる生涯を顧みたさい、第一にわれわれの注目をひくのは、かれが極めて多面的な活動分野をもち、しかもそのいずれの分野においても優秀な業績を残していることである。その活動は学問研究の分野をこえて、東印度会社の勤務、政治家としての活動といった實際面にまで及んでいるのだ。

まず学問研究の分野においては、経済学、政治学、倫理学および論理学などに関して、当時としては第一級の仕事を成就した。しかもその仕事のうちあるものは今日においても精読するに値する生命をもちつづけている。またかれは当時ようやく重きをなしつつあったジャーナリズムの分野においても、急進的な自由主義者として活

潑な政治評論活動を行なった。その晩年においては、みづから国会に議席を占め、その高い政治的信念を貫徹させる活動の背後には、三十五年にわたった東印度会社における有能な職員としての勤務がひかえていた。その活動のどの一つをとって見ても、優に人間の一生を傾けても悔いのないような仕事をしている。ミルはじつに多面的な活動を行なったのである。

第二に、ミルにとって特徴的なことには、このように多面的な活動のどの部門においても、これを単なる余業とは考えず、常に全力を傾けて、これにあたっているのである。東印度会社における勤務も単に米塩の資を得るための方便とは考えていない。かれは精励その職務に努めた。ミルは十七歳で入社してから着実に昇進してい

き、五十歳にして審査局長の重職についている。たまたま審査局長在職中、政府は東印度会社廃止の方針を打ち出した。かれはこれに対する会社側の抗争の中心人物として活躍している。しかもこの抗争にあたってかれが政府に具申した意見書の論旨は、その『代議政体論』 *Considerations on Representative Government* (1861) の主要な部分として取り入れられているのだ。

また政治評論家として時務をとらえて實際家らしい具體的な政策を述べるにあたって、かれは常に学問的興味をはなれず、その思想体系との関連を見失うことはなかった。けっして場当りの議論はしていない。一八三二年に選挙法改正が行なわれてから一八四六年穀物米令が廃止されるまでの十四年間は、イギリス政界が最も多難を極めた時期の一つであった。ミルはこの時代、急進派の理論的指導者として華々しい活躍をすると同時に、その主著である『論理学体系』 *System of Logic* (1843) を完成したのである。しかもいかにもミルらしいことには、この二つの仕事はたがいに関連のある事柄なのであった。論理学研究によって社会科学に方法的統一を与えることこそ、政策上の見解の対立を調節し、急進派の

大同団結を成就するための不可欠な前提条件となる、とミルは考えていたからである。

さらに学問の諸領域における仕事においても、どの一つの部門をとってみても、ミルはいかにも専門家らしい手堅さをもって終始している。ミルは総合的思想家ではあったが、ヘーゲル *Georg Wilhelm Friedrich Hegel* (1770-1831) の場合のように、総合的な哲学的原理によって専門科学の業績を再検討し、これをその哲学体系のうちに摂取しているのとは異って、みずから専門家の一人として、それぞれの専門科学の分野においてこれを前進させるために新しい業績を付け加えている。ミルの仕事は専門家の仕事として充分に通用するのである。

ミルは多方面な仕事をしたが、そのうちどれかの部門が目的であって、その他の部門は手段であるといった関係はなく、むしろどれもが目的であると同時に手段でもあった。総合的ではあったが、超越的な全体の立場から出発して部分を位置づけたのではなく、内在的に部分の集積によって全体の姿を捉えようと努めた。この意味においてミルは特異な人物であった。総合力と分析力にとともに恵まれたためずらしい性格の持主であった。こういう

性格はどうして形づくられたのか。

第一に、分析的であるとともに総合的であるためには、人一倍激しい精進を長い期間にわたって持続していかなくてはならない。ミルは幼い頃から父ジェームス・ミル James Mill (1773~1836) によって特異な天才教育をうけた。三歳にしてギリシャ語の学習を始めてから十四歳に至るまで、ギリシヤ、ラテンの古典、歴史書、数学、論理学、経済学と、ミルは激しい訓練のもとに学習をつづけていった。この教育はその教程において類を絶したものであるばかりでなく、その方法の厳格さにおいて驚くべきものがあつた。

父は子が普通の子供たちと交わつて悪い影響を受けてはならないと考へて、子供たちとの交際をまったく禁じた。父の厳しい監視のもとに、ひたすら勉学をつづけた。怠け癖がついてはいけなかつた。休暇はまったく与えられなかつた。ミルはこのように激しい訓練に耐え抜いて、十四歳の頃にはすでに普通の大学教育を修了したのと同等の学力を身につけた。この教育の結果、ミルは人並みすぐれた勤労の習性を植へつけられ、しかも常人より「四分の一世紀」早く世にでることとなつた。

そのためミルの六十七年の生涯のうち、青壮年期とも称すべき時期が極めて長いものとなつた。この長い活動期を常人よりすぐれた勤労の習性をもつて活動をつづけたのである。

そのうえミルはその体力においても恵まれていた。ミルは八人の弟妹をもつていた。父ミルはこれらの子供たちにも激しい訓練を加えたが、かれらは一人としてこれに耐えなかつた。ひとり長子のジョンだけがこれに耐え抜いたのである。弟妹の多くは肺を患つて早死してゐる。長女ウィルヘルミナは一八六一年に、次男のジェームスはその翌年に死し、三男のヘンリーは最も早く一八四〇年に亡くなり、四男のジョージもまた一八五三年に倒れている。ジョンもまた長じてからは、しばしば重い病氣にかかつてゐるが、その都度これに打ち克つて、六十七歳まで生きた。幼時の激しい訓練に耐え、また累次の病氣に打ち克つたところをみると、ミルは生来すぐれた体力に恵まれていたのであらう。こういう条件が揃つたことが、ミルが多方面の仕事をなすにあつて力があつたことは疑えない。しかしもちろんこれだけではな

第二に、これと並んで必要なことは、問題に対する強靱な探求心であろう。ミルは単なる勤勉家ではなかった。まじめな勤勉家は得てして狭い専門の世界に閉じこもって、生涯単なる技術家ないし事務家に終るものが多い。事務には精励ではあるが広い視野を欠き、深い問題の意識がないために独創的な仕事には適しない。ミルはこういう類いの勤勉家ではなかった。

父ミルは子に対し、その早期教育を行なうにあたって、努めて子の自発的な思考能力を養おうとした。やたらに高級な知識を詰め込んで、子の能動的な性格を圧死させる危険を極力さげようとした。そのため父はその教育の模範をソクラテスに求めた。ソクラテスの弁証法にならって、問答を通じて、子の思考能力を養おうとした。それは多くは朝の散歩の時間を利用して行なわれた。父と子とは連れだつて散歩しながら、子は前日みずから読んだところを父に語る。父はこれに関連して鋭い質問を発して、子の理解力を強めようとした。中途半端な解答では許さなかつた。究極まで問いつめるのであつた。ミルはこのような訓練の結果思考能力が進歩した。とくに論理学については非凡な能力をもつようになった。ミル

はどんな問題に対してもいい加減な解決ではけつして満足しないようになった。みずから納得のいくまで問題を究明しようと、あらゆる努力をおしまなかつた。

第三に、多面的な活動にとつて必要なことは、問題に対する柔軟な感受性である。しかしこの感受性はもちろん父の教育によつて形成されたものではない。父が範としたソクラテスの弁証法は、問題を深め発展させるうえでは大きな効果をもたらすものであつても、それだけで多面的な問題そのものに対する感受性を養いうるものとは限らない。とくに父ミルのように激しい気性の持主が、努めて情味を殺してその子に臨んだような場合には、逆効果さえ生みやすい。しばしば父は子に対して到底その能力に及びがたいような問題を発し、子が正しい答をなし得ないからといって、癩癩を破裂させている。気安く自己の意見を述べ、疑問を訴えられる相手ではなかつた。同年輩の交友仲間もなく、孤独なその世界には父が強烈な気性をもつて殆んど専制的な力を振っている。そのうえ当時、父は定職をもたず生計は困難で、家庭内の空気には険しいものがあつた。こういう世界に閉じ込められたミルが、思索に対する新鮮な意欲と問題に

対する活き活きした感受性を養いえたのは、むしろ不思議であつたと言つてよからう。

通常あまりに厳格な父親のもとにあつた子供は、あるいは徒らに反抗的な性格になるか、または内気な無気力な人間になるかのいずれかであるようだ。ミルがそのいずれにもならなかつたのは、かれが殆んど女性的といつていいほど柔軟な感受性をもつていたためであろう。かれがもし単に強い激しい性格の持主であつたならば、おそらく徒らに反抗的な人間になつていたであらう。またもした単に知的な性格の持主であつたならば、過剰な知識の重圧のもとに融通のきかない「思考機械」(thought chopping machine)になつていたことであらう。しかし幸いなことには、ミルは豊かな情感に恵まれていた。

ミルの感受性はまず自然の風物に対する愛情となつて現われた。幼い頃、ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham (1748~1832)) のお伴をしてイングランド各地を周遊している間に、ミルは自然の風物に対して深い愛情をもつようになった。また父の教育が一応終つた頃、ジェレミーの弟にあたるサミュエル・ベンサム (Sir Samuel Bentham (1757~1832)) 將軍に招待されて、南フランスに

一年余旅行した。そしてピレネー山脈の風景にいたく心を動かされてからは、この傾向は生涯を通じて変らないものとなつた。厳格な父の膝下にあつた当時、自然の風物は幼いミルにとってその感情の唯一の解放の道であつた。

二十歳の頃、ミルは重い神経衰弱にかかつた。深い懷疑に囚われ、今までの生活と思想に対して否定的な感じをもつようになった。その結果、父の教育と思想との一面性に気づき、これから脱却しようと苦悩を重ねた。父ジェームスは、人も知るように、ベンサムの功利主義とリカードの経済理論とを結合して、ベンサム主義とも呼ばれるような思想体系を築きあげた。この思想をその啓蒙的教育論の信念にたつて、長子ジョンに教え込み、その思想運動の指導者に仕立てあげようとした。ミルはこの父の計画に反撥するようになった。この「精神の危機」からミルを救つてくれたものは、ウァーヅウァイス (William Wordsworth (1770~1850)) の詩であつた。ミルはこの体験を通じて感受性の尊さを知つた。そしてこの感受性を涵養するうえで詩の有用なことを覺つた。ミルは情感の涵養に意識的に努めることになつた。この時期か

らのミルの生涯は情感の発達の歴史であると言ってもよいであろう。そしてそれはまた異質的な思想に対する接触反応の過程でもあったのだ。

ミルがある公開討論会の席上でウァーヅウァースの詩論を発表したことが機縁となって、スターリング John Sterling (1806~1814) と親交を結ぶことになった。これはミルの生涯にとっては一つの転期を意味していた。ミルが父から受けた教育は、啓蒙的教育論に従って社会的功利の向上のみを人生の目標とするような人間に育て上げるためのものでもあった。ベンサム功利主義の実践上の指導者をつくろうとしたのであった。スターリングはベンサム主義とは対立するロマン主義を奉ずるものであり、コウリツヂ Samuel Taylor Coleridge (1772~1834) の流派に属していた。ミルはスターリングを通して他派の思想に接触していくことになる。しかもスターリングはミルが自主的に交わりを結んだ最初の友人でもあった。かれとの交友関係は人間らしい情味にみちた麗わしいものであった。さらにスターリングだけでなく、モリス Friedrich Denison Maurice (1805~1872) などロマン主義者とも交わりを拡げ、その影響を受けるようになる。

る。このようにしてミルのベンサム主義以外の思想の摂取が始っていく。自然美の享受となって現われた幼時の情感は、今や新しい思想の摂取を行なわせることになった。しかも時代は、異質的な思想がたがいに交錯し合つて、複雑な過渡期の様相を呈していた。若いミルの心のなかに錯雑した時代の様相がじかに反映していくのである。

ミルの柔軟な感受性はさらにカーライル Thomas Carlyle (1795~1881)、サン・シモン主義者、ロント Auguste Comte (1798~1857) などの思想の摂取となって、その視野を拡大させていく。ミルは一八二〇年代の末期にフランスに渡り、サン・シモン主義者に接して、その歴史主義にたつた不平等社会主義の思想の洗礼をうけたが、さらに一八三〇年代にはカーライルに傾倒し、一八四〇年代にはロントに兄事してその思想の視野を拡大していった。カーライルはコウリツヂのロマン主義を発展させ、ドイツ観念論に近い思想を展開させた特異な思想家であり、ロントはサン・シモン派から出て社会学の創立者となった総合的な思想家であった。いずれもベンサム主義とは対立する思想の持主であった。

ミルはこれらの思想家と親しく交わり、その教示を仰いでいる。これら先輩へ送ったミルの書簡は、相手方の特殊な用語法をまねて、その文体をさえ模倣している。

しかも文通の初期においてはその書簡のなかで、相手の思想との同意点を強調して、その相違点には努めて触れないようにしている傾向さえある。しかしミルは自己の思想に忠実でなかったわけではない。書簡の往復が重ねられていくにつれて、内容は次第に論争がかって来て、遂に文通が絶えるようになる。ミルは柔軟な感受性の持主ではあったが、自己主張の出来ないほどの弱い意志の持主ではなかった。

ミルは種々の異質的な思想に接して従来の思想の織物がとどころどこ破れだしてくるのに気づくと、安じてこのままに放任しておくことはできなかった。異質的なものを取り入れて、しかも調和のある織物ができるまで、せつせと織り直しにかかることになった。思想の相違をそのままにしておけなかった。対立する思想を分析して、その相違をつくりだしている条件を明らかにするまではやめなかった。そしてこのような条件が明らかにになると、条件を調整して種々の思想を結びつける道を見出

そうとする。こういう調整作業を累積して行って、その多方面な思想の体系を築きあげていったのだ。

本節は拙著『ジョン・S・ミル』(東洋経済新報社、一九四七年)の「序論」(一〇二―一〇三ページ)を補筆改稿したものである。

ペンサム主義をめぐって

ミルの思想体系は、ペンサム主義とこれに対立する諸思想類型との総合調整の過程を通じて形成されたものであった。したがってその思想の性格を理解するためには、ペンサム主義をミルがどのようなかたちで受けとめていたか、またその受けとめかたが本来のペンサム主義の性格とどんな関係にたっていたか、を吟味することから始めるのがよいであろう。

ミルはその幼時の教育において、ペンサム主義をその生活の全面を蔽うものとして受け取るように仕向けられた。ペンサム主義以外にその生活はないように教え込まれたのであった。したがってミルにとってペンサム主義は、なによりもまずその個人生活を左右する個人倫理として受けとめるほかはなかったし、またそれは最善のも

のとしてアブリオリに注入されたといった圧迫感を伴うものでもあった。これに対するミルの一個の人格としての反撥が、「精神の危機」といったかたちをとってあらわれた。事柄はすべてミル個人の生活の内面にかかわるものとして展開していったのだ。この事実を注視することこそ、ミルの思想的遍歴を理解する鍵となるであろう。

ミルはベンサム主義を個人倫理として受け取ったし、また単純な原理にたった演繹的体系として受けとめた。そしてこれらの側面を通してベンサム主義に反省を加えていった。しかしベンサム主義の本来の性格からいえば、ミルが主要な問題としてつかみだしたものは、かならずしもその基本的な意図と同じ次元にあるものではなかった。ベンサム主義は個人倫理であるよりも社会倫理であったし、またその方法的な性格においても演繹的体系であるよりも帰納的な体系であったのだ。ミルの特殊な体験は、ベンサム主義をその本来の性格とは異った次元で、これを問題としないわけにはいかない状況をつくりだしていったのである。そこには微妙な問題に対する視点の変換が行なわれていたのである。

ベンサムはその功利主義を自然法思想にかわる社会倫

理説として提唱した。自然権といった超越的な原理のうえにたった自然法思想が、社会秩序の構成理論として実際のな役割を有効にはたしえないことを覚ったベンサムは、これにかわって社会福祉の促進といった目標を定め、社会制度のそれぞれの側面における改革がこの目標に照応させてみるとき、どれだけの意義をもっているかを明白に判定できる基準を提示しようとした。この判定基準がほかならぬ「最大多数の最大幸福」であったのだ。その功利主義は社会改良の判定基準を明示しようとするものであった。それは社会的功利主義であり、社会倫理であったのだ。

ベンサムの功利主義は倫理学説としては欠陥のないものではなかった。しかしこれを社会改良の判定基準を与えるといった役割に關してみる限り、ある条件が許されるならば、有用な理論であった。その条件とは、個々人の幸福がデータとして与えられるならば、ということにほかならない。法学者であり、法制上の改革に直接の関心をもっていたベンサムにとっては、この条件が近似的に成立する分野に視点を合わせて、その功利主義説を展開していくことに、さした困難を感じなかった。社会改

良にあたる政策担当者に呼びかけるかたちで、その功利主義を唱道していったのだ。

ベンサムはその功利主義を社会改良の方法論を提供するものと考えた。個々人の幸福がデータとして与えられれば、これらを集計して行って、それぞれの社会改良策の適否を判定するといった提唱は、ベンサムにとって経験に訴える帰納的な方法論を唱道することにほかならなかった。自然権といった形而上学的原理に基礎をおいた自然法理論が、演繹的体系であるのに対して、「最大多数の最大幸福」といった経験的指標を重要視する功利主義は、まさに帰納的体系であると考えられていたのである。

こういったベンサム思想の性格を物語る挿話に、かれがパノプティコン Panopticon 制作に熱意を傾けていたという事実がある。パノプティコンというのは、理想的な刑務所の模型である。受刑者のだけれもが自由に振舞っているという感じをもって行動していながら、その行動がちゃんと監視されていて、適当に調整されているといった仕組みを、模型のうちに組み立ててみようとしたのである。ベンサムはこの模型のうちに単に刑務所の理想

図を描こうとしただけでなく、社会組織のありかたをも例示しようとしたのだ。かれの功利主義はこの監視者のためのものであった。大衆の行動をデータとして逐一つかみ、これを適当に導いていくさいの基準こそ、功利主義が与えようとするものであったのだ。

このパノプティコンを幼いミルの勉強室と比べてみよう。ミルは父のジェームスが東印度史の草稿をかいていた部屋で、その教育を受けた。特別の勉強室はなかった。勉学以外の自由な生活もなかった。こういうかたちで実験されたベンサム主義の育成は、ベンサムじしんが描いた社会改良の構図とはおよそ距ったものであった。父ミルがジョンにたたき込んだベンサム主義には、監視者と自由な大衆との区別はなかった。ジョンはなによりもまず自分じしんに対する監視者としてベンサム主義を実行していかなくてはならなかった。社会改良の判定基準はジョンじしんの行動の動機を規制するものに転化していったのである。

ベンサム主義はその判定基準を適用するにあたって、個々人の幸福は客観的なデータにあらわれた「結果」とおしてつかみ、これを社会福祉として集計していくさ

いにはそれぞれの幸福を「平等」に取り扱うべきものと見ている。個々人の幸福を外面にあらわれた「結果」に即してつかむとすれば、個々人がその内面の「心情」においてどのような感受の仕かたをしているかは直接には問題とならない。個々人の「心情」はいわばカッコのなかに封じておいて不問にふるのである。しかしミルの場合のように、これを個人倫理の次元においてとらえることになれば、その「心情」のうごきを問題にしないわけにはいかない。自己の幸福は単なるデータとしては処理できない。自分が幸福かどうかはなによりもまずその心情の内面にかかわることである。

さらに自他の幸福の評価において「平等」でなければならぬといった基準をも、自己の内面の心情にまで沈潜させて考えたとすれば、これはたいへんな自己抑制を意味することになる。「最大多数の最大幸福」を自己の心情において受けとめ、行動の動機づけを規制する原理として課せられたものと考えなくてはならないとしたならば、ベンサム主義はおよそ窮屈な身動きのできない倫理となる。ミルが反撥したベンサム主義は、このようなかたちのものであった。ミルは個人倫理としてのベンサ

ム主義に批判を加えたのであった。

ミルのベンサム主義に対する批判はおよそ三つの論点をめぐるものであった。第一は、個人の心情をベンサム主義より解放することによって、かえって個人はその幸福をかちとることができるということであった。これはミルがその「精神の危機」における体験を通じて味得したところのものであり、またコウリツヂ主義者やカーライルとの接触を契機としてこれに理論的な裏づけを加えたものでもあった。

ミルは「精神の危機」とそれからの脱却の体験をとおして、人生における積極的な活動にあって幸福を得る道は、かえって幸福を断念することにあることを知った。自己の幸福を得ることを目的として、社会改革にたずさわらるならば、たえず自己が幸福であるか否かを分析してみなくてはならない。ところがたえずこのように意識的に分析をはたらかしていくと、幸福ではなくなるようだ。しかしそういう分析を企てず、社会改革の一つの目的としてこれを追求していくならば、そこに人生の充実した張合いが生れるであろう。そして意識はしないが幸福になっていることでもあろう。人生の営みそれみずか

らを一つの目的と考える態度、自己の幸福を実現する手段とはみないで、これを一つの理想として仰ぐ態度——これこそが適度な幸福を得るただ一つの道である。自然に対して幸福追求の意欲を忘れて対する時、人はかえって静かな幸福感にひたりうるように、人生に対しても、幸福追求を目的とせず、何らか他のものに心をすえて、その営みをつづけるならば、幸福はおのずから得られるであろう。ミルがその「精神の危機」における苦しい体験を経て到達した確信は、このようなものであった。

この確信から振返ってベンサム主義を反省したさい、ミルはベンサムがその個人の生活においても「最大多数の最大幸福」をその行動基準として振舞っているように映じた。ミルはその「ベンサム論」Bentham (*Westminster Review*, 1838) においてベンサムの生活態度の狭隘さを批判して、こうかいている。「人間性の最も自然でまた強烈な感情の多くに対してかれはなんらの同情もたなかつた。人間の深刻な体験の多くをかれは知らなかつたし、それによって異質的な心意を理解し、これと同感しうるような能力を、かれは想像力の欠除のために欠くことになつた。」このミルのベンサム評価は、人間として

のベンサムの理解の仕かたとしては過酷であることはベンサムを知るほどのものにとつては——そしてミルはベンサムを最も身近かに知っていたものの一人であったので——明らかにはずであるが、ミルがあえてこのような批評を企てたのは、「最大多数の最大幸福」という基準を個人の行動動機としてはならないといった差し迫った感じをもっていたためであろう。そしてその反面、人間性について豊かな受取りかたをしているコウリツヂ主義者やカーライルに対しては、その復古的な保守主義に対しては到底同調できないはずであったのに、個人倫理の次元においては、これに接近していったのである。

このように個人倫理の問題についてはベンサム主義者と異つた見解をもつたミルも、もちろんただ個人倫理の内面にだけ沈潜していたわけではない。やがて社会倫理の次元に立ちかえつて問題を展開することになるが、そのさいかれは社会福祉の向上というベンサムがかかげた目標は正しいものとしてこれを採用する。そこで社会福祉の目標と、かれが個人倫理の次元でつかんだ人間観とをどのようにして調整するかが、重要な問題となる。ベンサムが社会と個人との関係を処理するために用いた「平

等」原則は、ミルの場合には、人間性をあまりにも単純に理解しているものとして批判される。

このようにして、第二に、ミルは個人の幸福感の内容については質的な差異があることを強調して、ベンサムのように、これを平等に一単位として評点し、集計していけば、社会福祉が測定されるといった主張に批判を加える。かれはその「功利主義論」Utilitarianism (1863)において、「満足している豚であるよりも不満をもっている人間であるほうがよいし、また満足しきっている愚者であるより不満をいだいているソクラテスになったほうがよい」といった著名な言葉を、ベンサム主義批判としてかき残しているのだ。個々人の幸福は同質のものとして計量できるものではなく、そのうちに質的な差異を含んでいることは自明であるが、この自明の事実を指摘するだけではもちろん倫理学の問題は解けない。

個々人がそれぞれ自己の幸福のほうが他人のそれよりも高次なものであると主張することになれば、ただ倫理上の混乱がもたらされるだけである。質的な差異を含みながらも、これを比較可能なかたちに直さなくてはならない。それには客観的な評価の基準がなくてはなら

い。この点に関連して、ミルはつぎのようにかいている。「もし快樂における質的な相違とは何であるか……と問われるならば、可能な答えはただ一つしかない。二つの快樂について、両者とも経験したことのあるすべてのもの、もしくはほとんどすべてのものが、あらかじめなんらかの道徳的な義務感によって強制されることなくして、そのうちのいずれかを選択するならば、それがより欲求度の高い快樂となるのだ。」⁽³⁾

ミルは同一の経験をもてば相似の選好を行なうと想定して、質的差異をもった快樂について評価のうえでの統一をもたらしうるとなした。しかしミルはすべての個人が同一の経験をもちているとはみていない。その人格が高尚になるほどその経験は内容が豊富になり、したがってその快樂の選好の視野が拡大し、社会福祉の向上に役立つような選択が行なわれるようになる。「それゆえに功利主義はただ人格の高尚さの一般的な育成によってのみその目的を達成しうるのだ。」⁽⁴⁾

第三、人格の高尚さの育成にとって最も重要なことは、自由、とくに少数者の自由を容認することである。ミルの著名な論文「自由論」On Liberty (1859)は、いわ

ゆる自由主義の社会においても「多数者の専制」が行なわれることに注目し、(イ)人格の発展にとって自由の容認こそ不可欠の条件であるといった人格主義の視点にたつて、少数者に対して自由を保証することこそが、(ロ)社会福祉の向上にとって肝要であることを主張したものであった。

ミルは当時の社会が多数者の意見をもとにして、個人の行動に対する社会の規制が広範に行き渡っていること、したがって社会の秩序の維持については不安が少ないことを認めている。しかし多数者が主として平俗な意見をもっているところから、秩序は安定していても、進歩の可能性が失われるおそれがあることを憂えているのである。広範な意見の一致があるところでは、秩序は批判にさらされ、その存立の理由を吟味されることが少ないために、慣行的なものに化していくおそれがある。慣行であるがゆえにこれに従うとあっては、文明は単なる形骸となってしまう。こういう社会でベンサム主義が適用されるとすれば、幸福に関する社会的に通念化した選好の仕かたがあるので、その適用は容易のように見えるが、そこに実現される社会福祉は内容的には低次のもの

となろう。いなむしろ慣行的な選好が支配しているから、ベンサム主義を事新しく適用する必要が感ぜられないであらう。

こういう事態を打開するためには、少数者の自由を最大限に容認することによって、社会の慣行に対してその存立の理由を批判的に検討させ、慣行とは異った生きかたのあることを行動をもって示させることが肝要であらう。それによって文明は形骸と化することを防止され、新しい生命を注入され、進歩への道が開かれるのだ。内部に批判と緊張をもたない文明は衰退していく。この衰退を防止することこそ、少数者の自由な活動である。この自由のあるところにおいて初めてベンサム主義はその本来の機能をはたすようになるのだ。

個人倫理の次元でベンサム主義に反撥したミルは、進歩の担い手としての少数者に注目することによって、ベンサム主義を社会進歩と結びつけてこれを編成替えることになった。ベンサム主義が自然法思想に対する批判をとおして形成されたことを思い合わせると、ミルの企図はベンサム主義と自由主義との関連において新しい局面を加えたものと言ってよい。ベンサム主義が、自然権

の形而上学にたつて自由そのものを目的視するところの、革新主義を排したのに対して、ミルはベンサム主義の目指した社会福祉の向上のためには、自由を容認することが肝要だと説いた。しかしもちろんミルはその自由主義によって自然法思想に復帰していったのではない。社会福祉の向上を動的な目標として、その達成にも段階的な差異があるものと見て、少数者の自由を容認し、その批判を活用することによって、この段階を逐次昇っていくことを唱道したのであった。

- (1) John S. Mill, 'Bentham' *Dissertations and Discussions* (3rd. ed., London 1875) Vol 1. p. 352.
- (2) John S. Mill, *Utilitarianism*, Everyman's Library ed., p. 9.
- (3) John S. Mill, *op. cit.*, p. 8.
- (4) John S. Mill, *op. cit.*, p. 11.

リカード経済理論をめぐって

ミルはその幼時の教育において、ベンサム主義と並んでリカード経済学をも教え込まれた。リカード経済学は、ジェームス・ミルの手によって、ベンサムの功利主義と結びつけられて、十九世紀初期の社会改良運動を裏

づける理論的支柱の一つとなった。この運動の新しい世代の指導者として教育されたジョンは、もちろんリカード経済学にも習熟するように仕込まれた。ところがミルはその思想的遍歴を通じて、リカード経済学に対しては、ベンサム功利主義におけるほど、血のにじむような対決はしていない。ベンサム功利主義に対しては否定的な批判を加えた時期においても、リカード経済学に対してはその信奉の態度に深刻な動搖を示してはいないのだ。

ミルにとってはリカード経済学は一つの専門的な個別科学であった。その理論が人間性のとらえかたにおいて「経済人」といった人間観を前提しているとしても、それは個別科学としての方法的擬制であって、なにもそれによって個人倫理を規制しようとするものではない。ミルはそう考えて、「経済人」を功利主義倫理とは別の意味のものとして解し、両者を一応分離することによって、功利主義批判がリカード経済学の根底をも掘りくずしていくことのないようにした。父のジェームスが結合させたベンサム功利主義とリカード経済学とは、ジョンの場合には、一応別の次元に属するものとして分離させられたの

である。

しかしもちろんミルはただリカード経済学を温存し、その理論を祖述していただけではない。ベンサム功利主義との対決をとおしてその社会思想のうえに転換が行なわれてくると、リカード経済学のうえにも編成替えが加えられてくることになる。かれの『経済学原理』(Principles of Political Economy (1st. ed. 1848)) はリカード理論とはニュアンスを異にする経済学の体系を示している。その点については、別の機会にしばしば解説を加えて来たので、詳しいことはそれらの論稿にゆずるとして、ここでは前節と関連づけて、主要な論点だけについて略述するにとどめたい。

第一に、経済学を一つの専門科学としてつかむことは、当然「経済人」を一つの方法的な擬制と考えることを意味しているが、このことはまた経済的動機だけ人間の行動が充分に理解できないことを含意しているはずである。この点を明確に自覚することになれば、リカード経済理論の内部の構成にも変更を加えなくてはならない。たとえば、人口増加の取扱いかたである。

リカード理論においては、人口は内生変数として取り

扱われていた。労働者の受け取る賃金が生存賃金を上廻っておれば、労働者はその余裕をあげて人口増殖につとめる。人口増加は食糧増産を刺激するが、それは土地收穫逓減の法則のもとに食糧生産費、したがってまた食糧価格、ひいては賃金率を上昇させることになって、利潤率、したがってまた資本蓄積を抑制する。こういう因果関係が累積されていけば、やがては資本蓄積は停止され、労働者は生存賃金を辛うじて得るだけで人口増殖を行ないえないことになる。そこには低水準の定常的状态が支配するようになるのだ。

こういう推論は、経済的要因だけが人間の行動を支配するといった前提にたつてのみ可能なことである。もしこの前提が否定されるならば、この推論もまた成りたたなくなるとなる。ミルのように、功利主義批判をとおして人格の向上につよい確信をいだくようになった思想家にとっては、このリカード流の推論は当然否定されることになる。ミルにとつては、人口はつねに経済にとつての内生変数であるわけではない。労働者の賃金が生存賃金を上廻ったからといって、かならず人口増殖が行なわれるとは限らない。社会教育のいかんによっては、高い賃金の

もとも人口増加の抑制が行なわれる可能性がある。この可能性を承認すれば、リカードの長期理論は修正され、経済社会の将来についての見通しも変化することになる。

第二に、文明の進展と人格の向上について深い信頼をもっていたミルは、経済社会についても段階的な発展を認めて、経済行動にも発展段階の差異に対応して型の相違があらわれることに注目している。労働の生産性あるいは資本蓄積の大小は、経済活動に対する人間の態度によって左右されるところが大きい。とくに資本蓄積についてこの関連を詳しく追及しているのである。

資本蓄積率を規定する主要な主体的要因は「有効な蓄積欲」であるが、これはまた社会形態と人間の態度とによって左右される。社会の秩序が安定し私有財産が制度的に尊重されている社会においては、蓄積欲は促進される。また他人——家族その他——の福祉に対する配慮がつよく、将来に対する関心が高いほど、蓄積欲は強化される。当時のビルマでは年率三〇%をこえる利子率が支配していても蓄積は遅々として進まなかったが、イギリスでは三%でも充分な蓄積が行なわれている。このよう

な大幅な蓄積欲の差異は単に経済的要因だけでは説明できない。社会形態の相違による秩序と保障の差異、他人に対する道徳的配慮または将来に対する知的予見など人間の態度の不同がこれに関連しているのである。

第三、ミルは経済発展を文明の進歩の一側面を形づくるものと見たが、この側面のもつ重要性は文明が高度化するにつれてだいに低下するものと考えていた。かれは文明の経済からの解放といった局面を将来に予想していた。この点に関しては、リカードなどの古典派経済学者と、経済思想としては、まったく異った型のものをいだいていた。経済が文明のありかたを規定するのではなく、経済から解放されるところに豊かな文明の展開が期待されると考えていたのである。

ミルはイギリスなどの先進国においては、資本蓄積欲がつよいことを認めていたが、同時にいかに蓄積欲がつよくとも利子率がある限度——たとえば二%以下——にまで低落すれば、資本蓄積は停止するであろうとも見ていた。そしてそれはさして遠い将来のことではない。近く資本蓄積はやんで経済社会は定常的状态に陥いるであろう。しかしそれはリカードの説くような「低水準の定

常的状态」ではない。それは、生存賃金をはるかに越える賃金率のもとで、人口増加を抑制したところに形づくられる状態であって、いわば経済の成熟した状態であり、「高水準の定常的状态」である。この状態とともに経済の成長はやむが、文明の進展はむしろここから社会福祉の向上を旨としてその本格的な展開を示すことになる。そのような状態のもとでは、経済の運営は社会主義の組織に従って行なわれるであろう。

第四、ミルの経済思想の転換は、功利主義とリカード経済学とのあいだに新しい次元において総合をもたらした。われわれはジェームス・ミルがペンサムの功利主義とリカードの経済学とを、社会運動の局面において総合したことを注意した。しかしこの総合には思想の内面における統一とは言えないものがあつた。ジョン・ミルはその思想的遍歴の初期にあつては、この結合をうちこわすことによって問題を整理したが、その遍歴のうちに到達したかれの思想のうちには、功利主義も経済理論も編成替えを受けたとはいえ、新しいかたちのもとでふたたび総合されることになつたのである。

ペンサム主義においては、社会福祉の向上を旨とした

社会改良が唱道されていた。そこに示されていた人間社会の将来に対する観測は明るいものであつた。ところがリカード経済学が経済社会の将来の動向に加えた観測は、「低水準の定常的状态」が示しているように、たしかに暗いものがあつた。ペンサムの樂觀主義とリカードの悲觀主義とは、明らかにたがいに対立している⁽²⁾。この兩者を一連の社会運動のうちに理論的支柱として撰取するにあつて、この対立にどのような調整が加えられたか、またどうして融和させられたか、当時の記録に基づいてこれを明確にすることはできない。ペンサム主義者たちもその批判者たちも、この対立を明示的に取りあげ、これを問題としようとはしてはいなかつたからである。これは今日から回顧してみると、むしろ不思議なことであると言つてよい。しかしミルの場合、ペンサム功利主義を長期的な発展理論に編成替えするとともに、リカード経済学からその暗い観測を取り除いて、これをこの長期理論のわくのなかに組み入れているのである。兩者の対立はミルによって初めて調整を加えられたのである。

このミルの新しい総合のうちにも問題がないわけでは

ない。『功利主義論』と『自由論』とをとおしてミルは社会発展の主要な条件を少数者の自由な批判的・創造的な活動のうちに求めた。これに対して『経済学原理』においては経済社会の成熟から社会主義への移行を説いている。この自由主義と社会主義とは、どのように結びつくのか、といった問題が残される。ミルにとって自由主義は社会主義と対立するものとは考えられていなかったであろうが、その理由としては、(イ)両者とも社会福祉の向上を目標としているものであったこと、また(ロ)社会主義としてかれが考えていたのは、サン・シモン主義者、フリーエ主義者たちフランス社会主義者たちの唱えた不平等社会主義であったことがあげられる。社会主義といっても、すぐれた少数者に対しては充分な活動の自由と余地を認めるものを考えていたのである。しかしそうは

言っても、社会主義の組織のもとで社会と個人の関係がどのように調整されるか、それについての明白な構図は描いてはいない。それはミルが解き残した問題であった。そこにミルの思想の未完成さがあるが、そのことによってかえってかれは現代に問題を投げかけ、その生命を保っているとも言えるであろう。

(1) たとえば、拙著『経済思想』(評論社、一九五八年)第七章第二節を参照されたい。

(2) ベンサムとリカードの思想の相違については、つぎに明快な解説が述べられている。参照されたい。

Overton H. Taylor, *A History of Economic Thought*,
(McGraw-Hill Book Co., 1960) Chap. 5 Benthamism,
p. 136.

(一橋大学教授)